12. 鼻アレルギーに対するヒスタグロビン・エアロゾル療法の臨床的検討

○岡崎英登、夜陣紘治、原田康夫
（広島大）

従前各種アレルギー疾患の治療に全身投与として使用されていたヒスタグロビンを鼻アレルギー患者にエアロゾル鼻腔局所投与とし臨床効果を検討したので報告した。

＜対象症例＞

昭和56年3月より9月末までに当科及び関連施設耳鼻科を受診した鼻アレルギー患者のうち、10才以上で急性上気道炎、副鼻腔炎、妊婦および妊娠している可能性のある婦人を除いた男22名、女28名計50名である。

＜臨床試験方法＞

ヒスタグロビン1vialを4ml注射用蒸留水に溶解し、1回¼vial週3回×4週、耳鼻科用ネビュライザー装置で鼻エアロゾル投与とした。

少数例では週2回×6週投与とした。総投与量は3vialとなる。

＜対象患者背景＞

年令は10才から56才であるが男女の分布差はない。

病型ではくしゃみ・鼻汁型23、鼻閉型11、鼻閉・くしゃみ型16である。

重症度は重症15、中等症32、軽症3であるが、軽症例は鼻閉(＋)、くしゃみ(＋)、鼻汁(卌)(奥田分類)の為本試験に組み入れた。

主抗原はダニを含むH.D 44、スギ花粉4、カンヂダ1、他1である。

既往治療は無11、有39(うち減感作経験11)であったが有39例は症状継続例である。

＜観察・検査項目＞

①問診表による背景因子分析、②鼻アレルギー日記、③鼻鏡所見、④アレルゲン皮内反応、⑤鼻汁好酸球、⑥血中好酸球、⑦鼻粘膜誘発反応、⑧血清IgE(RAST、RIST)、⑨ヒスタミン固定能、⑩副鼻腔X線検査である。各項目別の変動及び総合臨床効果の判定基準は(表1)の如くである。

＜項目別効果＞（表2）

a) 自覚症状：消失、著明改善、改善を有効群とすると、有効率はくしゃみ発作70%、鼻汁分泌74%、鼻閉60%、嗅覚異常改善26%、日常生活支障度改善44%となり前三者に比較して後二者は低い。

b) 鼻鏡所見：下甲介腫脹68%、水性分泌56%、下甲介色調50%の改善が得られた。

c) 鼻汁好酸球：消失36.6%、減少29.3%、不変34.1%、増加0、と明らかに低下する傾向がある。

d) 血中好酸球：治療前平均5.4±4.5%、治療後5.6±5.1%と変動はみられない。

e) 鼻粘膜誘発反応：消失11.4%、減弱34.3%、不変54.3%、増加0で減弱傾向がみられる。

f) ヒスタグロビン固定能：治療前固定能では512倍およびそれ以上43%、256倍およびそれ以下43%であるが、治療後では512倍およびそれ以上73%と明らかに上昇がみられた。又治療前後を測定し得た症例では上昇するものが多く、低下した症例はなかった。

＜総合効果＞（表3）

著効、有効を合せて有効症例とすると有効率は76%となった。現在までのヒスタグロビン¼vialエアロゾル投与の報告は20%～80%前後とばらばらであるが70%前後が最も多く、今回の本治験でも略同様の結果となった。

病型別での総合効果は鼻閉・くしゃみ型87.5%、鼻閉型66.6%、くしゃみ鼻汁型64%の順であり、重症度別では重症86.7%、中等症75.5%、軽症33%の結果となった。

また有効例の多くは最終投与1週間以上効果が持続した。

以上の成績よりヒスタグロビンのエアロゾル療法は有用であると考えられるが、今後投与量、投与間隔等について検討が必要である。

表1　症状・所見別効果の判定基準

効果判定	治療前後の変化
消　失	⧻ ⟶ －、⧺ ⟶ －、＋ ⟶ －
著明改善	⧻ ⟶ ＋
改　善	⧻ ⟶ ⧺、⧺ ⟶ ＋
不　変	⧻ ⟶ ⧻、⧺ ⟶ ⧺、＋ ⟶ ＋
悪　化	－ ⟶ ＋、－ ⟶ ⧺、－ ⟶ ⧻ ＋ ⟶ ⧺、＋ ⟶ ⧻、⧺ ⟶ ⧻

総合臨床効果判定基準

著　　効：重症度の２段階及びそれ以上の改善
有　　効：重症度の１段階の改善
やや有効：同一重症度内での改善
無　　効：改善なし及び増悪

表2　自覚症状の変動

	消　失	著明改善	改　善	不　変	悪　化
くしゃみ発作	9 (18%)	5 (10%)	21 (42%)	13 (26%)	2 (4%)
鼻　汁	8 (16%)	8 (16%)	21 (42%)	12 (24%)	1 (2%)
鼻　閉	8 (16%)	5 (10%)	17 (34%)	19 (38%)	0
嗅覚異常	4 (8%)	2 (4%)	7 (14%)	36 (72%)	1 (2%)
日常生活支障度	10 (20%)	3 (6%)	9 (18%)	27 (54%)	1 (2%)

鼻鏡所見の変動

	消　失	著明改善	改　善	不　変	悪　化
下甲介腫脹	2 (4%)	7 (14%)	25 (50%)	14 (28%)	2 (4%)
下甲介色調異常	○	9 (18%)	16 (32%)	25 (50%)	○
水性分泌	5 (10%)	2 (4%)	20 (40%)	23 (46%)	○

表3　総合臨床効果

		著　効	有　効	やや有効	無　効	悪　化	
		3 (6 %)	35 (70 %)	5 (10 %)	6 (12 %)	1 (2 %)	
病	くしゃみ・鼻汁型	1 (4 %)	15 (60 %)	3 (12 %)	3 (12 %)	1 (4 %)	25 (100%)
	鼻閉型	1 (8.3%)	7 (58.3%)	2 (16.7%)	1 (8.3%)	○	12 (100%)
	鼻閉・くしゃみ型	1 (6.3%)	13 (81.2%)	○	2 (12.5%)	○	16 (100%)
重症度	重　症	1 (6.7%)	12 (80 %)	○	2 (13.3%)	○	15 (100%)
	中等症	2 (6.3%)	22 (68.8%)	4 (12.5%)	3 (9.4%)	1 (3.1%)	32 (100%)
	軽　症	○	1 (33.3%)	1 (33.3%)	1 (33.3%)	○	3 (100%)